

曖昧性と創発のなかで生まれる音楽的コミュニケーション —子どもの状態に応じた演奏の変化と意味づけの分析— Musical Communication Emerging from Ambiguity and Emergence: An Analysis of Performative Changes and Meaning-Making in Response to Children's States

小林 梨紗^{†,‡}, 松原 正樹^{†,§}
Risa Kobayashi^{†,‡}, Masaki Matsubara^{†,§}

[†] 筑波大学, [‡] 聖徳大学, [§] 慶應義塾大学

[†] University of Tsukuba, [‡] Seitoku University, [§] Keio University

kobayashi.risa@wa.seitoku.ac.jp

概要

本研究は、幼児教育や療法における音楽実践を対象に、演奏者の即興的な応答の様相とその背景にある音楽の性質を検討した。3つの事例を分析し、模倣・補完・展開・同期といった応答の型や、音楽的・身体的・文脈的資源の活用が確認された。あわせて、音楽の曖昧性・同時性・連続性が、意味の共創を支える変数として機能している可能性が示唆された。

キーワード: 音楽 (music), 音楽療法 (Music Therapy), 相互行為 (Interaction)

1. はじめに

子どもを対象とした幼児教育や療法の実践場面においては、子どもの様子や状態に応じた柔軟な関わりが常に求められる。このような場面での音楽実践も同様に、子どもの身体動作にリズムを合わせたり、心理的・身体的な状態に応じて伴奏の仕方を即興的に調整したりすることで相互作用が生まれ、コミュニケーションが成立している (Biasutti, 2017; Pavlicevic, 2000)。こうした音楽実践は、創造的であり演奏者の熟練した判断と感性によって支えられている (Gold, Linington, & Lassmann, 2006)。

しかしながら、こうした実践知は暗黙的な技術として個人の経験に依存して継承されてきた。そのため、どのような演奏上の工夫や調整が実際に行われているのかが明確にされておらず、共有可能な知識としての体系化も進んでいない。まず、どのような変数があるのかが明らかとなっておらず、整理も十分にされていないことが課題である。今後の教育・療法実践の質的向上にとって性質や資源の変数を丁寧にみていくことは重要である。本研究の目的は、幼児教育や療法における音楽実践において、音楽のどのような性質が意味の共創を支えているかを紐解くことである。具体的には、演奏者が子どもの状態に応じてどのように調整を

行っているかに着目し、特に、音楽的・身体的・文脈的資源の活用を通じて、子どもとのあいだにどのような相互作用が築かれているのかを探索。

2. 音楽的相互作用の領域固有性

先行研究では、人間の認知や社会的相互作用を、身体や環境との関係性の中で捉える 4E 認知 (Embodied, Embedded, Enactive, Extended) の視座や、参加型意味形成 (Participatory Sense-Making) の枠組みにおいて、相互作用そのものが意味や理解を創発する場となることが示されてきた (Newen, De Bruin, & Gallagher, 2018; De Jaegher & Di Paolo, 2007 など)。また、創発的協調を可能にするメカニズムとして、引き込み (エントレインメント) や共通アフォーダンスなど、複数の主体が協働する際のメカニズムが整理されている (佐藤, 2018)。

身体の役割に着目した理論としては身体化された音楽認知 (Embodied Music Cognition: EMC) (Leman, 2008) があり、音楽の知覚や理解が身体的な動きや感覚と深く結びついているとする立場をとる。実際に、幼児が音楽に反応しながら身体を動かし、自らの行動を調整していくプロセスを観察した実証的研究も報告されている (Almeida, 2015)。こうした知見は、演奏者が身体を媒介として意味や関係性をつくり出す実践の理解を深める手がかりとなる。

以上のような理論的枠組みや知見を踏まえ、本研究では、演奏者が身体的経験や環境との相互作用を通じて、曖昧性や創発性を含んだ音楽的相互行為をどのように構築しているのか、またその中でどのような意味づけが生まれているのかに注目する。

3. 方法

3.1 参加者とデータの概要

本研究では、演奏者の実践に関する多様な知見を得るために、異なる実践背景をもつ3つのフィールド

(保育園, 幼稚園, 音楽療法)における音楽活動を対象とした。各フィールドにつき3回ずつ, 計9セッションの音楽活動を映像で記録した。データ収集にあたっては, できる限り自然な実践の様子を反映させるため, 活動内容や使用曲には制限を設けなかった。

収集したデータの概要は以下のとおりである。

- **保育園**: 2~5歳児を対象とした朝の会および音楽活動を収録。演奏者は担任3名と園長1名。子どもの人数は各クラス15名~23名程度。
- **幼稚園**: 4・5歳児クラスの音楽活動を収録。演奏者は音楽専門学校出身の教諭1名。子どもの人数は20~25名程度。
- **音楽療法**: 特別支援学校に通う小学生1名とその母親を対象とした個別セッション。演奏者は音楽療法士1名。

本稿では, これらの中から相互行為が顕著に観察された代表的な事例として, 音楽療法セッションから2例, 保育園の2歳児クラスから1例を取り上げる。^{*1}

3.2 データ収集と分析手法

各セッションの映像データに基づき, 子どもと演奏者のやり取りを中心に, 演奏中の相互行為を分析した。さらに, 演奏者の視点を補完するため, 各セッション後に半構造化インタビューを実施し, 演奏意図や子どもの反応に対する解釈を収集した。

映像データのアノテーションにはELANを用い, 子どもの行動, 演奏者の音楽的応答, 相互行為の展開過程について記述・整理した。分析では, 演奏者が音楽的・身体的・文脈的資源をどのように活用しているか, またそこからどのような意味づけがなされているかに注目した。

4. 観察から得られた相互行為の展開過程

4.1 子どもの音を手がかりとしたアンサンブル

本節では, 音楽療法セッションにおいて, 子どもが無作為に鳴らしたピアノの音を演奏者が音楽的な手がかり(音楽的資源)として捉え, それを基にアンサンブルに展開した事例を紹介する。この場面では, 子どもが発した音と過去の共有経験(文脈的資源)をふまえた意味づけがなされ, 即興的な音楽応答につながっていた点が特徴的である。

セッションのはじめ, 子どもA(以下A)はピアノの鍵盤に自由に触れ, いろいろな音を鳴らしていた。その中で, ピアノの低い音の「ファ(F音)」が何度か続けて鳴らされた。

1. Aがピアノの低音部で何度かファ(F音)を鳴らす。
2. それを受けて, 演奏者は童謡「ぞうさん」をF-dur(ヘ長調)で演奏し始める。
3. Aはそのまま音を鳴らし続け, 演奏者とアンサンブルを形成する。

このように, 演奏者はAの出した音を演奏の中心となる構成音として取り上げ, それに対してメロディやハーモニーなどの音楽的要素を「補完」するかたちで加え, アンサンブルとして展開していた。

このようなやりとりは, Aの発した音が単なる偶発的な行為として処理されるのではなく, 演奏者にとって過去の経験と結びついた「象徴的なきっかけ」として意味づけられたことで展開されたものである。演奏者はインタビューの中で次のように語っている。

「Aちゃん(は)低い音はぞうさんっていうことがあってね, やっぱそれ今初めてじゃなくて。(中略)なんか合図みたいにポンってやったら, 私がぞうさん来るかなみたいなのもちょっとあるかもしれない, 期待が。」^{*2}

この語りからは, 演奏者がAの出した音を過去のセッションと照らし合わせながら意味づけ, 音楽的に応答していたことがうかがえる。実際, 後日(第3回)のセッションでも, Aが低音域を弾きながら「ぞう」と発語する場面が観察されており, この音がAにとって象徴的な意味をもつ音として保持されていた可能性がある。

4.2 子どもの発話を展開の資源とする

本節では, 保育園の2歳児クラスにおける音楽活動の事例を取り上げる。ここでは, 子どもの発話のリズムに「同期」するように演奏が行われるとともに, 調性ややりとりのパターンを先導的に「展開」させる工夫を通じて, 子どもの注意が引きつけられ, 保育者との同調的なやりとりが促されていた。

対象となった音楽活動では, 保育者と子どもたちが「どうぶつ村の広場」という楽曲にあわせて, 登場する動物の名前や鳴き声を自由にアレンジしながら, 歌の展開をともに作っていく構成となっていた。

活動の前半では, 子どもの発話に保育者が即興的に応答するやりとりが見られた。たとえば, 子どもが「パンダさん」や「ロボット」といった言葉を発した際には, それぞれの語感やリズムに合わせて, 保育者が伴奏の音型やリズムを調整し, 言葉と音楽が同期するように演奏を変化させていた。

^{*1} 本稿では取り上げていないが, 幼稚園のセッションにおいても, 歌唱の習得段階に応じた演奏の調整など, 同様の応答が確認された。

^{*2} INT11: 演奏者 U11035 とのインタビュー, 11:16

一方、その後の場面では、保育者が子どもの発話を待つことなく、D-dur（二長調）からd-moll（二短調）への転調を行い、和音の響きを暗く変化させて「こわい雰囲気」を意図的に導入した。これに対して、子どもたちは「こわいこわい」と声を上げるなど、音楽がつくり出す雰囲気に感情的に同調し、その中で「砂かけばあ」という発話が生まれた。

活動の締めくくりには、伴奏は再び明るい調性とスタンダードなリズムに戻され、全体が穏やかな雰囲気で終結した。保育者はこの構成について、「今まではなんとなく聞いてた子も、（曲の雰囲気が変わること）一緒に引き込めるところがあるのではないかと述べており、さらに「みんながイメージしやすいオーソドックスな動物を4番目で入れることで、みんなでやって終わったという空気感を出せるのかな、と」*3と語っている。このように、本場面におけるやりとりは、子どもの発話や反応を起点として、音楽的・言語的に応答し合う中で、活動が共にかたちづくられていく様相を示している。

さらに、保育者が先導して音楽的表現を調整することで、活動の中で共有される音楽の雰囲気が、子どもの次の発話や身体動作へと再帰的に影響を与える様子も確認された。こうしたプロセスを通じて、子どもは自らの発話や動きが「音楽としてかたちになった」という実感を得るとともに、それが他者とのあいだで、間主観的に意味のある経験として共有されることを体験している。

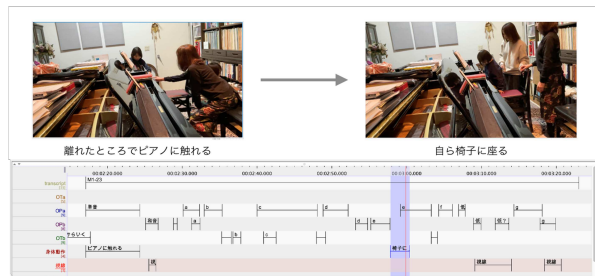
4.3 即興的な音の対話

本節では、子どもの音をきっかけに、演奏者との間で対話的な音のやりとりが展開された事例を取り上げる。Aを対象とした場面は第4.1節でも扱ったが、本節では異なる視点から、別のセッションにおけるAとのやりとりを紹介する。このときAは、ピアノの奥に立ったまま鍵盤に触れており、能動的な関与はあまり見られなかった。

そうした中で、Aが高音から低音へと滑り降りるようなグリッサンドを弾いたことを契機に、演奏者が同様のグリッサンドを「模倣」して応答した。これを受けてAも再びグリッサンドを弾き返し、模倣と再模倣を繰り返すような音のやりとりが始まった。その後、演奏者が今度は逆方向（低音→高音）のグリッサンドを提示し、Aもそれを模倣するかたちで応答するなど、音による即興的な対話が形成されていった。

このような音によるやりとりは、主体感が交互に移

図1 ELANのアノテーション



り変わる構造を含んでいた点に特徴がある。たとえば、最初にAが提示した高音から低音へのグリッサンドに対して、演奏者が模倣で応答したあと、今度は演奏者の側から逆方向のグリッサンドを提案し、子どもがそれを模倣し返すというように、能動と受動の役割が交互に交替するかたちで音のやりとりが展開された。このときの演奏者も、

「（音を）私は真似して弾いたでしょう。あれ、すごい好きなんです。あれですごく盛り上がることもあるのね。まるでこう言葉でやり取りするみたい。向こうが好きに弾いて、私に真似させて、でも、まあ、なんかすごくやり取りしてる感じでテンション上がっていくんですね」*4

と語っており、模倣の往復が、やりとりや対話として実感されていることがうかがえる。

また、このような主客の交代を含んだ音楽的対話の中で、Aがそれまで立ったまま鍵盤に触れていた状態から、自ら椅子に座ってピアノに向かう姿勢に変化したことは、音楽活動への能動的な参加の表れと捉えられる（図1）。

5. 考察

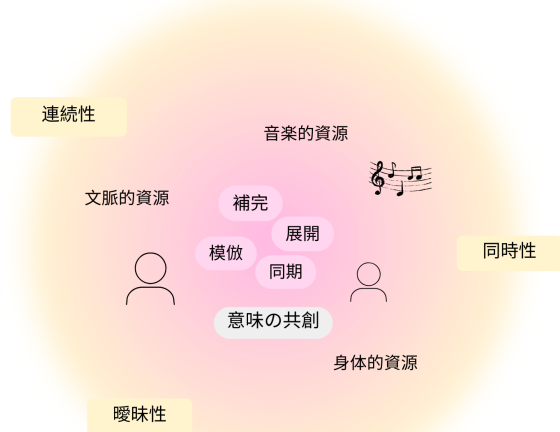
本研究では、3つの事例を通して、演奏者が子どもの行為に即してどのように即興的な応答しているかを検討した。とくに、模倣・同期・補完・展開といった応答の型と、それを支える音楽的・身体的・文脈的資源の組み合わせに注目した。

事例1では、特定の音に意味を見出し、それを音楽的に補完しつつアンサンブルへと展開する、文脈的資源の活用が確認された。事例2では、子どもの発話のリズムに演奏を同期させる応答や、調性ややりとりのパターンを変化させて惹きつける展開的な演奏が見られた。事例3では、グリッサンドの模倣を通じて対話的な関わりが生まれ、主体性が交互に移り変わるやりとりが展開された。

*3 INT06: 演奏者 U06011 とのインタビュー, 6:03

*4 INT11: 演奏者 U11006 とのインタビュー, 0:43

図2 演奏者の資源活用における概念とその変数の例



これらの事例に共通するのは、演奏者が模倣・同期・補完・展開といった応答の型を状況に応じて柔軟に使い分け、音楽的・身体的・文脈的資源を重層的に組み合わせている点である。これらの応答は固定的なものではなく、補完から展開へと連続的に移行していくような動的なプロセスとして現れていた。

また、こうした柔軟な応答を支える背景には、音楽という表現形式が持つ「曖昧性」「同時性」「連続性」が関与していると考えられる。演奏者は、子どもの行為の解釈を一義に定めず、曖昧さを残したまま応答することで、相互作用の可能性を広げていた。また、複数の行為が同時に進行する状況下での即時的な判断（同時性）や、関係性が少しずつ展開していく過程（連続性）も、実践を支える重要な要素の一端として示唆された。

これらの考察を通じて、演奏者は即興的な判断を重ねながら、子どもとの関係性を築くために多様な資源を活用し、意味を共創していることが明らかとなった。

6. 演奏者の資源活用における概念とその変数の例

本章では、先に考察した3つの事例をもとに、演奏者による資源活用の特徴を整理した概念的に捉えた図を提示する（図2）。この例では、音楽的・身体的・文脈的資源の活用と、それらに基づく即興的な応答（模倣、補完、展開、同期など）との関係を構造的に表しており、それらのやりとりが、音楽のもつ「曖昧性」「同時性」「連続性」といった性質によって支えられていることも併せて表している。

ここで示したモデルは、あくまで限られた事例に基づくものであり、普遍的な枠組みとして一般化を目指

すものではない。ただし、各事例で観察された資源活用の傾向や、演奏者の柔軟な判断のあり方を可視化することで、実践における即興的関わりの理解を深める手がかりとなることを期待している。

7. おわりに

本研究は、幼児教育や療法における音楽実践を対象に、音楽のどのような性質が意味の共創を支えているかを明らかにすることを目的とし、3つの事例を検討した。これらの実践には曖昧さや不確実性が伴い、演奏は正解のない状況において関係性をつくる営みとなっている。やまだ（1987）が述べるように、人と人との関係は「互いの間に共通のものをつくり出すいとなみ」であり、音楽を介した即興的なやりとりも、その一形態といえる。

また、音楽がもつ「曖昧性」「同時性」「連続性」といった性質は、意味を限定しすぎない応答を可能にし、相互行為に余白を生むことで、共創的な展開を支えていたと考えられる。本研究の視点や枠組みは、こうした実践の記述や即興的判断の理解に向けた一つの手がかりとなり得る。今後は、より多様な事例を通じて、その妥当性や応用可能性を検討していくことが課題である。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費（課題番号：24K05862）の助成を受けて実施されました。

文 献

- Almeida, A. P. R. D. R. (2015). *Embodied musical experiences in early childhood* [Doctoral Thesis, University of Edinburgh]. <http://hdl.handle.net/1842/21039>
- Biasutti, M. (2017). Teaching improvisation through processes. Applications in music education and implications for general education. *Frontiers in Psychology*, 8, 911. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2017.00911>
- De Jaegher, H., & Di Paolo, E. (2007). Participatory sense-making: An enactive approach to social cognition. *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, 6(4), 485–507. <https://doi.org/10.1007/s11097-007-9076-9>
- Gold, R., Linington, C., & Lassmann, H. (2006). Understanding pathogenesis and therapy of multiple sclerosis via animal models: 70 years of merits and culprits in experimental autoimmune encephalomyelitis research. *Brain*, 129(8), 1953–1971. <https://doi.org/10.1093/brain/awl075>
- Leman, M. (2007). *Embodied Music Cognition and Mediation Technology*. MIT Press.
- Newen, A., De Bruin, L., & Gallagher, S. (Eds.). (2018). *The Oxford handbook of 4E cognition*. Oxford University Press.
- Pavlicevic, M. (2000). Improvisation in music therapy: Human communication in sound. *Journal of Music Therapy*, 37(4), 269–285. <https://doi.org/10.1093/jmt/37.4.269>
- 佐藤 徳 (2018). 人と人の「間」にある叡智. 心理学評論, 61(3), 362–378. <https://doi.org/10.24602/sjpr.61.3.362>
- やまだ ようこ. (1987). ことばの前のことば: ことばが生まれるすじみち 1. 新曜社. ISBN 4788502623.